

テレビ記号論とは何か

導入報告

石田英敬 ISHIDA Hidetaka

● 東京大学大学院教授。東大仏文科を卒業、「ゲーテンベルク銀河系」の周縁部から文字と書物の文明を問うたフランスの大詩人マラルメの研究から出発し、千頁にも及ぶマラルメ研究の博士論文で、パリ第十大学から人文科学博士号を受ける。情報やメディアへの関心の出発点は、文字を単位として人間の文明を問う「人文学者」としての仕事にある。1992年から東大助教授、教養学部では「記号論」を講ずる一方、大学院言語情報科学専攻の設立に参画し、言語や記号の視点から文化や社会を研究する新しい研究分野として「言語態研究」の立ち上げを主導。2000年の東京大学大学院情報学環の設立に参加し、記号論の新たな展開として「情報の知」と「意味の知」の架橋をめざす「情報記号論」を提唱している。

研究室ホームページ：<http://www.nulptyx.com>

基調報告

フランソワ・ジョスト François JOST

● パリ第三大学教授。メディア映像・音響研究所 (CEISME) 所長。フランスにおけるテレビ研究の第一人者として、テレビについての理論的研究に携わる。近年は、いわゆるリアリティーショーなどの新たなジャンルの台頭に取り組む (L'Empire du Loft, 2002) とともに、70年代におけるテレビ状況の広範な分析を行っている (Années 70 : la télévision en jeu, 2005)。

テレビジャンル、映像を超えて：テレビ番組分析のための方法論的提案

この発表の狙いはどんなテレビ番組であれその分析を可能にする一連の概念を提出することである。

この概念体系の基礎にあるのは、テレビジャンルである。そして出発点となるのは、ジャンルを安定した単位として定義しようという試みではなく、むしろジャンルがジャーナリストを媒介とした制作者・放送者・視聴者のインターフェースを構成しているという考えである。

ここでは、あらゆるジャンルはある世界との関係の約束であり、その存在様式とレベルが受け手の支持と参加を条件付けるものと考えられている。別の言い方をすれば、書かれたものであれメディアのものであれ、広い意味での素材は、送り手の目指す信念のタイプに従って生み出されるのだし、逆に受け手はその素材を現実結びつける関係についての考えを予め持つことなしには、それを解釈することが出来ない。ここで問題となるのは、現実の世界・フィクションの世界・ゲームの世界という三つの世界である。

ジャンルがテレビ的「コミュニケーション主体」の間で行われるプロセスにおける第一のものであるのに対して、映像が副次的なものだとしても、テレビ映像が働かせる記号と世界の関係のタイプを明確にする必要があるだろう。そこから、世界の記号、作家の記号、素材の記号が区別される。

先に定義した概念によって、約束に基づいたテレビコミュニケーションのモデルと、視聴者の解釈能力に基づいたモデルが立てられるが、ここで明らかにされるのは、存在論的と語用論的という二つの約束のタイプである。

チャンネル側が行う約束の脱構築、番組の分析と受容の分析が三つの異なった契機であり、異なった方法論に依拠するのだとしても、チャンネル側の戦略、番組の機能、そしてそれらの解釈が基づいている基礎はアブリオリに定義されるものである。(フランソワ・ジョスト)

基調報告

朴明珍 PARK Myung-Jin

●ソウル大学コミュニケーション学科教授。ヴィジュアル・メディアの専門家として、長らく記号論とディスコース分析の教鞭をとる。パリ第三大学で博士号取得（ヴィジュアル・コミュニケーション）。韓国政府の放送改革委員、情報・コミュニケーション委員などを歴任後、現職。

韓国におけるテレビ記号の分析：その問題圏と方法論

韓国におけるテレビ研究は、数量分析に基づいた内容分析の方法によって70年代に幕を開けた。カルチュラルスタディーズとともに導入された記号論は、テレビの表象を分析する批判的道具として受け入れられ、それが「現実の構築」にほかならないことを明らかにした。テレビのディスコースと、多様なディスコース的実践によって媒介された社会的実践の分節に力点を置く、カルチュラルスタディーズの理論的發展によって、研究者たちは、記号論・ディスコース分析（「批判的言語学」に由来する）・様々なディスコースの社会的理論を接合することに至った。今日、民主化・グローバル化・デジタル化は、新たなテレビ記号を生み出すことで、「エンパワーメント」・自己語り・ジャンルの混淆・現実的なものとヴァーチャルから構成された「<新しい現実>の構築」といった新たな研究領域に道を開いている。これらの進展は、それに相応しい方法論を要請すると同時に、次の再生を予告するものでもある。（朴明珍）

討議

原由美子 HARA Yumiko

●NHK放送文化研究所副部長。テレビ番組の国際性・国際理解への効果などに関する研究、人々の情報行動・テレビ視聴行動に関する研究に携わる。主な編著書に『外国メディアの日本イメージ：11カ国調査から』（2000）、『台湾・多チャンネルテレビ視聴者と番組：台湾の多チャンネル化と日本』（1997）などがある。

討議

小林直毅 KOBAYASHI Naoki

●県立長崎シーボルト大学教授。メディアテキストとメディア言説に関する理論的、思想的な研究、テレビ視聴理論の体系化に関する研究、水俣病事件報道のメディアテキストとディスコースに関する研究に携わる。主な著書に『メディアテキストの冒険』（2003）、『テレビニュースの社会学』（2006、共著）など多数。

参考資料

《フランソワ・ジョストの仕事》

日常生活がコミュニケーション、メディアの一般化を経験する中で、理論もそれに影響されずにはいないが、言語をめぐる理論において、それはコミュニケーション論的（ディスコース的あるいは語用論的）転回と名指されている。この転回は、従来の言語内在的な態度から、受容者との関係性、コミュニケーションの現場への注目の移行によって定義される。80年を越える歴史を持つ大衆メディアとしてのテレビは、このような歴史的・理論的転回を最もよく表すものだと言えるだろうが、中でも、国営放送から民間放送へという、大きな変化を経験したヨーロッパ諸国では、この転回をめぐる理論が様々なかたちで提出されることになった。いち早く民営化を経験したイタリアで提起されたのが、U.エーコによ

るパレオ／ネオTVの議論である。この議論は、同様な経験を遅れて経験したフランスの研究者に多大な示唆を与えたが、そこではエーコの議論の発展的継承として、テレビコミュニケーション（あるいはコミュニケーション一般）が「契約」に基づいて行われるものだとする議論が提起された。ここで言う「契約」とは、一定の意図を持った送り手と一定の期待を持った受け手の間で成立していると想定される合意のことである。そして、この契約のタイプによってテレビ番組の分類が試みられている。

F・ジョストの仕事が位置するのはこのような文脈においてであり、その仕事は、「約束」の概念に基づいたジャンル論の提起に端を発する。この議論によれば、テレビのようなマスコミュニケーションにおいて、送り手と受け手の関係は、契約論が想定するような、双方向的・相互的なものではなく、一方から他方に課せられた、専制的なものであるという認識の下、その関係を規定するのにふさわしいのは、「契約」ではなく、「約束」だということになる。ところで、標準言語行為論によれば、約束という行為が、他の行為の中の一つではなく、それこそが言語行為の範疇だとされるが、その意味では、約束を基にしたジャンル論は、先に触れたコミュニケーション論的転回を代表する理論の一つと言えるだろう。そして、ジョストの理論において、この約束は、ジャンルとして実現され、それをインターフェースとして視聴者は、現実・フィクション・ゲームの三つの世界と関係する。テレビ番組はこの三つの世界を頂点として持つ、三角形上にマッピングされる（下図を参照）。中でもジョストが主題としてきたのは、現実とフィクションの多様な関係、現実（感）の構築の諸様態であり、その分析のために「feintise（見せかけ・装い）」という概念を提起する。もともと、このような問題設定自体は決して新しいものではないが、近年のリアリティーショーの隆盛を前にして、そのアクチュアリティーは依然失われていないと言えるだろう。

また、INA（国立視聴覚研究所）のInathèqueにおいては、日本における国立国会図書館が書物について行っているのと同様に、1995年以来、映像資料のアーカイブ化を行い、これまでも、研究者による閲覧が可能であった。しかし、先頃その一般への公開が開始され、10万本におよぶ映像資料にインターネットを通じてアクセス出来ることになったが、約束によるジャンル論は、制作者側の言説も含めた、膨大なメディア素材を分析し、マッピングする上で大きな力を発揮し得るものでもある。

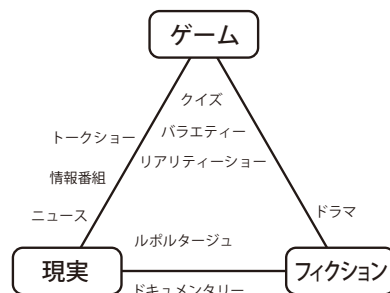
このような理論的・実践的利点は、テレビコミュニケーションにおいて、受け手よりも送り手の側、フローよりも作品としての側面に重きを置くことから得られるものである。しかし、その反面、視聴者による受容のエスノグラフィックな調査から、解釈の多様性・自由を明らかにしたカルチュラルスタディーズらの研究に対して、いかに応えうるのかということが課題の一つとなるだろう。

以上、ジョストの議論が置かれた文脈をみてきたわけであるが、彼の議論からわれわれは何を得られるのだろうか？ まず、アーカイブ化などの面において、研究環境が立ち後れている日本においては、彼の議論が前提としている環境自体から、大きな示唆を得ることが出来るだろうし、そもそも膨大な情報量を備えたメディア素材の研究についての方法論を練り上げていく上でも重要なヒントを与えてくれるだろう。同時に、約束や「feintise」という諸概念の提起に基づく理論系構築の試みは、無意識的ともいえる、習慣として制作を行いがちな現場の制作者に、自らの実践を客体化する一助ともなると思われる。この意味で、ジョストの仕事は、公共放送と民間放送、公共性（public）と広告性（popular）の混淆が著しい日本の放送の現状を考える上で貴重なものであるといえよう。

（西 兼志／ロッド・マイヤール）

〈フランソワ・ジョスト主要著作〉

- La télévision française au jour le jour (1994)
- Introduction à l'analyse de la télévision (2000)
- Télévision du quotidien : Entre réalité et fiction (2001)
- L'Empire du Loft (2002)
- Comprendre la télévision (2005)



テレビ・コンテンツ研究の現在

◎ テレビジョンを分析対象とすることは極めて困難な道のりである。我々には、テレビの全てを把握することはできないのだ——この事実は、その存在と我々を取り結ぶ関係性のねじれを表している。

テレビ・コンテンツは、映像と音声という極めて高密度の情報によって生成されながらも、伝送装置の「小さな画角」によって巧みに「日常性」を纏う。それによって発せられるメッセージの記号としての自律性は抑制され、そこに多様かつ膨大な無意識の領域を介在させるようになる。「全てのテレビ番組を見たという人は存在しない」にもかかわらず、誰もが（小さな子どもですら）テレビジョンを傲慢に批評するという現在の状況は、こうしたことを背景に成立する。だからこそ我々は、テレビジョンという存在のありようを追い求めるとき、どうしてもこの「領域」に向かわざるを得ないのである。

このラウンドテーブルでは、テレビ・コンテンツ生成の規則性に注目した研究を皮切りに、そこから浮かびあがる「無意識の領域」の様相について、情報科学的、政治・産業論的、存在論的な眼差しを差し込んでいく。

パネリスト

増澤洋一 MASUZAWA Yoichi

● 千葉工業大学社会システム科学部経営情報科学科助教授。1959年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。ハーバード大学教育哲学研究所客員研究員、作新学院大学経営学部助教授を経て現職。博士（経営情報学）。専門分野は経営業務マニュアルなどの自然言語をシステムモデリング言語（図表）に変換する理論及び要素技術の研究である。分析・変換対象としての画像や音響効果にも強い興味を持っている。主要論文：「神経回路網モデルによる言語変換理論の検証」（国際経営工学会）、「SMAD—構造化業務マニュアル分析設計理論」（国際情報システム学会）、「構造化業務マニュアル分析設計手法による日米経営の融合とナレッジマネジメント・組織学習への効果について」（国際システム科学会議）他。

報告1：テレビの言語性について

テレビドキュメンタリー『プロジェクトX』の実証的分析

本研究はテレビ記号について「言語性をもつ」という仮説を設定し、経営情報科学（具体的には経営工学及び認知言語学）のフレームワークを援用し検証を試みるものである。分析対象としてNHKドキュメンタリー『プロジェクトX』を用いた。以下に仮説を列記する：

・仮説1 テレビ言語の最小要素を仮に語彙素、画素、音素とする。これらは一般学術・技術用語とは必ずしも同義ではない。語彙素が一定の規則のもとに序列（並び）を作ったものを「文」、画素のそれを「シーケンス」、音素のそれを「音響効果」と呼ぶこととする。自然言語と異なり、意味を持つのは最小要素ではなく、「文」や「シーケンス」のレベルである。これを最小意味単位とする。このレベルでは各要素が緊密に結びついていると仮定する。

・仮説2 テレビ言語において完成作品すなわち「番組」は第一階層（最小要素：語彙素・画素）から第二階層（最小意味単位：文・シーケンス・音響効果）、第三階層（パラグラフ、プロジェクトXではド

キュメンタリー1,2,3)を経て最終階層(物語)に至る構造を持つと考える。さらに、下位の階層がParadigmとして上位の階層すなわちSyntagmを支えるとする。

・仮説3 文の序列(並び)は確率過程(マルコフ連鎖)によって決定されるとする。例えば、「状態」を明示的或いは暗黙的に表現する文・シーケンス・音響効果が現れるとある一定の確率で「行為」を示す文・シーケンス・音響効果がそれに続くはずだと仮定する。

以上の仮説に基づきナレーション、画像、音響効果のそれぞれに分析パラメータ群を設定し、テレビ番組に対して分析・検証を行った。結果として以下の3点が観察された。

・検証1 シーケンスが最小意味単位であるのは議論の余地が無い。また、要素間の相関(結合性)については「ナレーション」と「シーケンス」の間には微妙な「ずれ」が見られ、「音響効果」はシーケンス(の境界)を越えているケースがあるものの、発声・曲調がそれぞれシーケンスに合わせて調整されているため両者の相関・結合関係がはっきりとわかる。

・検証2 まず第2階層(シーケンスレベル)について同じ(類似した)「シーケンス」がマスターショットとして要所に度々現れ、物語進行や視聴者の理解を助けている。このことから「シーケンス」はパラグラフ形成のためのParadigmを成していると考えられる。また、「音響効果」については番組(物語)を横断して何度も使用される部分があり、一層Paradigm的である。次に第3階層(パラグラフレベル)についても厳格にタイムキーピングされ(ドキュメンタリー1, 2, 3の時間比率が同一)、間に挿入されるスタジオショットも高度に形式化・構造化されている。さらにスピーチ(発話)コントロールもパラグラフ特性を考慮し十分に調整されている。以上からパラグラフは「最終階層」物語のParadigmとなっているといえる。

・検証3 典型的なシーケンスのつながりは実写白黒写真のZ/I、再現ムービー、本人(回顧)、集団写真のZ/Oで構成される。このようなマルコフ性(順序性)が所々観察される。

以上のようにテレビ記号の言語性に関する仮説はある程度検証された。次の課題は分析の「機械化」である。そこで今後の研究の方向性としての画像分析技術、神経回路網シミュレーションによるナレーション、ショットの意味解析について言及し本研究の結びとする。(増澤洋一)

パネリスト

原 宏之 HARA Hiroyuki

● 明治学院大学教養教育センター助教授。全学共通科目機構外国語部会フランス語代表。専攻は教養(表象メディア論・言語態分析)および比較思想史。1969年生まれ(川崎、鎌ヶ谷、浦安と非行の街を転々)。専門教育・研究は、東京大学大学院総合文化研究科、放送大学、国際哲学コレージュ、コレージュ・ド・フランス、EHESS、リエージュ大学大学院などで修行。学歴上は、パリ第十大学人文学科群博士課程中退。学術修士。日本学術振興会特別研究員(東京大学)・東洋大学等非常勤講師(2001-2002)を経て、明治学院大学専任講師(2002年)、2005年より現職。著書に『〈新生〉の風景』(冬弓舎)、訳書にジャック・デリダ/ベルナル・スティグレル『テレビのエコグラフィ』(NTT出版)、『ミシェル・フーコー思考集成』(分担訳-筑摩書房)など。

報告2: 〈世界〉はどこにある?

「報道」されたことだけが「事件」となる。あたりまえのことのようですが、あたりまえのこととして受け容れるのを断固拒否す〈べき〉点です。記者クラブや捜査関係筋から「リーク」されたことだけが、「ニュース」(目新しい知らせ)となる。このことは、散々批判されてきましたが、変化は認められません。今日では、「グローバル化」のなかで、より事態は複雑になっています。欧米・東アジアのOECDクラブの利害に関与しない「南」あるいは「第三世界」でいったいなにが生じているのか? 「画面」がすべてのわれらには知るすべもありません。

「恐怖」「おぞましいこと」が生じているのかもしれませんが、電波に乗らない以上生じていないのかもしれませんが。少なくともわたしたちの意識の上では「省略」されています。放送は、制度的にも「公共性」の性格を刻印されています。わたしの解釈では、「公共性」とは、「正義」が貫徹される〈べき〉場です。このことの問題を少し考えてみたいと思います。(原 宏之)

パネリスト

和田伸一郎 WADA Shinichiro

● 大阪医科大学、京都学園大学非常勤講師、精華大学TA、京都大学博士（人間・環境学）。1969年神戸市生まれ。専門はメディア論、哲学。著作として『存在論的メディア論 ハイデガーとヴィリリオ』（新曜社、2004年）、『メディアと倫理 画面は慈悲なき世界を救済できるか』（NTT出版、2006年）。論文に「マクルーハンの《感覚比率》概念について」等。

報告3：テレビと「お茶の間」

1 テレビのメディア性

・テレビ画面の〈形式〉と〈コンテンツ〉の区別 ——テレビの〈コンテンツ〉から区別される〈形式〉とは何か。ケネディとニクソンが対決した1960年の大統領選挙における有名な史上初のテレビ討論を例に挙げながら考える。マクルーハンによれば、同じ〈コンテンツ〉であっても、それが容れられる〈形式〉が異なれば、違った受け取られ方をする。テレビ画面固有の特性とは何か。それは視聴者が画面に対して親密さ、気安さの感覚を持つところにある。

2 テレビとそれを見る空間

・「お茶の間」で弛緩する身体に親和的なものとしてのテレビ画面 ——その親密さはテレビが見られる空間である「お茶の間」へのわれわれの在り方に関わる。人は、世界の厳しい現実（労働の現実、人間関係、社会関係の現実等々）からの避難所である「我が家」に帰ってきて、そこでくつろぎ、休息してから、また世界の現実へと出て行く。テレビが見られるのは、この休息中の気楽なひとときである。このくつろいだ、弛緩した身体が見る画面である以上、テレビを見る眼は、弛緩した知覚である。

・世界から〈退きこもる〉空間としての「お茶の間」 ——さらに「お茶の間」という空間の世界からの逃避の度合いが、時代によって変化してきたことも指摘しておかねばならない。テレビによる戦争報道を通じた視聴者の意識の変化。ヴェトナム戦争（1960年代）、湾岸戦争（1991年）、イラク戦争（2003年）。

3 テレビと環境との連動

・空間とテレビ画面の連動 ——テレビは住む空間の撤退、世界に住むことの貧困化に適合するかのようになり、世界から距離をおいた安全な場所から傍観する「窓」として画面を構成してきたのではないだろうか。

・映画、テレビ、インターネットというメディアの連動システム ——テレビ画面のこの傍観する小窓としての役割はインターネットにおいてさらに大きく担われる。また逆に、最近のドキュメンタリーを意識した或る種の現代映画は、画面のこの傾向に抵抗している。

・衰弱する画面への抵抗 ——傍観窓であることに対してテレビはどのように抵抗できるだろうか。このことは、テレビだけによってなしうることではない。マクルーハンが述べたように、一つのメディアはつねにすでに他の複数のメディアとの連動の中で作動している。そうである以上、変革はこの連続性を考慮に入れながらなされなければならない。(和田伸一郎)

司会

水島久光 MIZUSHIMA Hisamitsu

● 東海大学文学部広報メディア学科助教授。1961年、東京生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業後、広告会社、インターネット・メディア企業「インフォシーク」に勤務。2001年インフォシーク退社後、東京大学大学院学際情報学府修士課程を経て、2003年より現職。専門はメディア論、情報記号論。著書に『閉じつつ開かれる世界 メディア研究の方法序説』（勁草書房）、論文に「情報バラエティのダイクシスとアドレス」（『社会の言語態』東大出版会刊、2002）、「バラエティ化する日常世界」（『放送メディア研究』第三号、NHK放送文化研究所刊、2005）など。

記号技術としてのテレビ

◎ テレビジョンとコンテンツ、及びそれをとりまく環境は、誕生して50年の間、ほぼ同じ技術基盤の上に成立していたという事実を多くの人は忘却している。当然、これまでのテレビジョンの記号的特性も、この基盤に支えられていたわけである — 「放送と通信の融合」、今日訪れた状況は、なによりもこの安定を揺るがすものに他ならない。

そこには、テレビジョンに対する開発者たちの様々な解釈・理想が映し出されている。それらを重ね合わせることは果たしてひとつの「新しいテレビジョン像」の構想に結実するのかそれともテレビはいくつかの異なるメディアに分解されていくのだろうか。

このラウンドテーブルでは、いま「放送」と「通信」の狭間に生まれつつある三つの技術に注目する。それによって、まずはこれまで我々を支配してきたテレビジョンという存在の自明性が問われることになるだろう。デジタル技術を母体とするこの変化の中で、これからのテレビジョンはどのような情報の流れを形成し、意味を創りだしていくことが可能になるのだろうか。またその過程の中で失われるものとは何か — 開発者たちとの対話を通じて「ポスト・テレビ」時代のメッセージ基盤と、それに対する我々の向き合い方を考えていく。

パネリスト

川森雅仁 KAWAMORI Masahito

● NTTサイバーソリューション研究所主任研究員。放送と通信が連携した環境におけるコンテンツメディア流通技術の研究開発に従事。メタデータ、携帯・固定サービス連携（FMC）技術、権利管理保護などの技術を使って、ブロードバンドでの高度コンテンツ流通、サーバー型サービス、ユビキタス・マルチメディア・コンテンツ・サービスに向けた開発を主に行っている。また電波産業会（社）「サーバ型放送方式作業班」メタデータTGリーダー、TV-Anytime Forum Metadata WG チェアマンを歴任。ITU-T、CEA（全米家電協会）などでも標準化活動をおこなっている。

報告1：メタデータを用いたサーバー型放送のナビゲーション

テレビそして「放送」が大きく変化しようとしている。従来、放送とお茶の間のテレビ受信機とはきつてもきれいなものであり、お茶の間でみんなと一緒に楽しむものであった。しかし、携帯向け地上デジタル放送（1 Seg）が始まり、PodCastingやPC向けの放送コンテンツ配信が普及した今、放送コンテンツの楽しみ方は、「いつでも、どこでも」という形になろうとしている。テレビ受信機自体も単に映像と音だけを受けていたアナログ時代とは違い、デジタル化によってPCのような機能を備えるようになり、様々なエンタテインメントや情報を提供する総合情報端末へと進歩している。

多様化・増大するコンテンツに対して、i-PodやWebが示唆していることは、ネットワークやデバイスに透過的な、検索・ナビゲーションの重要性であり、そのために重要な技術がメタデータである。

新しく始まる「サーバー型放送」を例に、メタデータ関連の技術やサービスを紹介し、テレビの新しいあり方について考える。（川森雅仁）

パネリスト

林 正樹 HAYASHI Masaki

● NHK放送技術研究所。1959年生まれ。1983年、東京工業大学卒、NHK入局。1986年より現職にてコンテンツ制作の研究を続ける。1999年東京工業大学にて博士号取得。2000年～2003年まで東工大客員助教授を兼任。バーチャルスタジオの研究の後、1996年に番組制作言語TVMLを発表し、これをベースに、新しいテレビの世界を追求し、現在に至る。

報告2：TVMLによるテレビ番組の自動生成

パソコンの上で、ワープロ台本を書くだけで、CGを使ったテレビ番組が自動生成される技術を研究してきました。「台本」が「映像」になる、という至って単純な発想ですが、これが意外に大きなポテンシャルを持っているのです。元々は、TVML (TV program Making Language) という、テレビ番組を記述するスクリプト型のコンピュータ言語を開発したところから始まります。TVMLプレイヤーというパソコンソフトが、TVMLで記述した台本を読み取り、リアルタイムCGや音声合成を使って即座に番組映像を作り出します。

TVMLは比較的簡単な言語ですが、いまだコンピュータ言語的なもので、一般の人が書くのには無理があります。そこで、言語の取っつきやすさの敷居をぐっと下げて、ワープロレベルまで落とすことを考えました。ちょうどワードの上で文章を書くように、テキストを書き、絵を貼り込んだりするだけで、これをダイレクトにTVML番組に自動変換する仕組みを作ったのです。また、こうして作った台本をインターネットのサーバーにアップロードし、これを専用のブラウザでテレビ番組として自由に見られる仕組みをネット上に構築しました。いわば、テレビ版のブログともいえるものです。ここまで来て、従来のテレビ放送とまったく異なる放送システムの樹立が現実味を帯びてきました。今まで、なかなか表舞台に出ることがなかった「個人」や「コミュニティ」による自由なテレビ放送の実現です。ここでは、この「言葉をテレビにする」という考え方に基づく、色々な発想をご紹介できれば、と思います。キーワードを以下に並べてみます。

コミュニティ・個人放送局の実現 ～ 技術的には、ユーザー側にTVMLプレイヤーを置くことでユーザー側に番組制作機能を持たせること、テレビセットの進化 ～ 受け側で映像を作り出すことで、テレビ番組をパーソナライズできる ～ 映像音声の流通ではなく、言葉が流通することでビジュアルな世界を作ること ～ この世界では、パロディ／改変／パクリは当たり前になる、一種日本のとも言えないか ～ ITにおいて、テキスト文化の次に映像文化が来るのではなく、テキスト文化と映像文化が相互作用を起こす世界が来る ～ ビジュアルがテキストを生み、テキストがビジュアルを生む、その循環 ～ 危険性については、内容・ビジュアル共に低品質、プライバシー・コピーライト・セキュリティ問題 ～ だからこそ、従来型放送局は良質な放送を提供し続ける必要があるとも言える ～ 放送というものが、大手とロングテールの両輪を持つということ (林 正樹)

パネリスト

佐野 徹 SANNO Toru

● 日本テレビ放送網株式会社メディア戦略局。1967年生まれ。デジタル放送や放送・通信連携に関する新規ビジネスの企画、立案、推進業務を担当。特に地上デジタル放送携帯端末向け放送（ワンセグ）については、社団法人地上デジタル放送推進協会携帯サービス検討会の主査として、ビジネスモデルや規格内容のとりまとめを担当。著書には『1セグ放送教科書』（インプレス、2005、共著）などがある。

報告3：ワンセグ放送が生む放送から通信への誘導

地上デジタル放送の目玉の一つ、ワンセグ放送がいよいよスタートした。このサービスは単に携帯端末にテレビ画面を搭載しただけではない。そこからは放送から通信の世界への誘導という、あらたなメディア接触のかたちが始まることが予感される。

この新しいサービスが生み出されるまでの「仮説」、スタート後の様々な反響などを報告する。

司会

境真理子 SAKAI Mariko

● 江戸川大学メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科教授。東京大学科学技術インタープリター養成プログラム非常勤講師「科学技術表現論」担当。札幌市出身。北海道テレビ（HTB）で制作部、報道部に所属し、環境・宇宙、医療・福祉、教育などを主な取材分野に、ニュースやドキュメンタリー制作に携わる。2001年、日本科学未来館の開館準備に参加。メディア設計グループリーダーとして、出版／映像制作／ウェブ／ライブラリーのメディアデザインを担当した。2005年4月から江戸川大学（千葉県）でメディアリテラシーや映像論、ドキュメンタリー論を教える。主な著作『グローバル・メディア革命』（リベルタ出版・共同執筆）『送り手たちの森～メディアリテラシーが育む循環性～』（NIPPORO文庫・共同執筆「メディアリテラシーの工具箱」（東大出版会・共同執筆）他。1997年から「地方の時代映像コンクール」、2000年から民間放送連盟主催の「民放連盟賞・報道ドキュメンタリー部門」の審査員を務める。

ダイアログ (14日 15:30-17:30)

記録と記憶 ドキュメンタリーとテレビ的情報空間

“ヒロシマ”を巡る諸問題

報告

水島久光 MIZUSHIMA Hisamitsu

●プロフィールはp.7を参照。

報告

西 兼志 NISHI Kenji

● 東京大学情報学環研究拠点形成特任研究員。コミュニケーション学を専門とし、フランスでは、ダニエル・ブーニューのもとで学ぶ。主な論文に、「発話媒介行為による言語行為論～メディア行為論 I」（『言語態』第6号）、「秘密と嘘～コミュニケーションの限界」（『言語情報科学』第4号）、「〈顔〉の記号論の可能性」（『セミオトポス3』）などがある。

『ヒロシマ』、『Hiroshima』

TBSが2005年8月に放送した『ヒロシマ』は、BBC、ZDFを中心として制作された『Hiroshima』を〈オリジナル〉とし、様々な先行テキストを取り込むことから成り立っている。その両者を記号論・コミュニケーション論の方法論に基づき分析することで、3時間におよぶ民放プライムタイムの「ドキュメンタリー」として異彩を放つこの番組が、実のところ、〈いま・ここ〉のテレビ的コミュニケーションを如実に表していることを示す。（西 兼志）

討議

桜井 均 SAKURAI Hitoshi

● NHKスペシャル番組センター、エグゼクティブ・プロデューサー。1946年生まれ。東京大学文学部フランス文学科卒業。1969年にNHK入局後、主に教養番組、ドキュメンタリーなどの制作に携わる。著書に、『埋もれたエイズ報告』（1997）、『テレビの自画像』（2001）、『テレビは戦争をどう描いてきたか』（2005）などがある。

討議

金平茂紀 KANEHIRA Shigenori

● TBS報道局長。1953生まれ。1977年にTBS入社。社会部記者、モスクワ支局長、『筑紫哲也NEWS23』デスク、ワシントン支局長歴任後、現職。著書に『世紀末モスクワに行く』（1994）、『ロシアより愛を込めて 世紀末モスクワ特派員滞在日誌』（1995）、『電視的』（1997）、『二三時的』（2002）などがある。

討議

港千尋 MINATO Chihiro

● 多摩美術大学教授。1960年生まれ。1984年早稲田大学政治経済学部卒業。80年代に南米各地に滞在後、パリを拠点に写真家、批評家として活動。『In-between 2 港千尋 フランス・ギリシア』（2005）、『影絵の闘い 9.11以降のイメージ空間』（2005）、『瞬間の山 形態創出と聖性』（2001）、『洞窟へ 心とイメージのアルケオロジー』（2001）など多数。

コーディネーター

石田英敬 ISHIDA Hidetaka

● プロフィールはp.1を参照。